



TITLE:

欲望と忘却：ブランショ論の試み

AUTHOR(S):

織田, 年和

CITATION:

織田, 年和. 欲望と忘却：ブランショ論の試み. 仏文研究 1975, 1: 1-13

ISSUE DATE:

1975-08-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/138539>

RIGHT:

欲望と忘却——ブランショ論の試み

織田年和

Parler, désirer, rencontrer : il se rendait compte que, jouant avec ces trois mots (et, par là, introduisant le quatrième manquant, le jeu du manque), il ne pouvait produire l'un plus tôt et plutôt que les deux autres, sauf si le jouer en premier, ce n'était nullement lui donner un premier rôle, pas même celui d'une carte sacrifiée en vue d'une stratégie. Jeu qui peut-être consisterait à les tenir ensemble, sans pouvoir les tenir pour éléments d'égale valeur, ni d'inégale, ni comme les données apparentées d'un *même* jeu — ce qui d'emblée détruisait le jeu, à moins que celui-ci, devenant jeu de destruction, n'en vînt à acquérir aussitôt, par là, une prééminence aussitôt fautive. Cela reste pourtant vrai : il a fallu qu'il les rencontre (d'une manière ou d'une autre, peu importe) pour qu'en parler soit possible; il a fallu qu'il les rencontre pour désirer les rencontrer (ou pressentir qu'il aurait pu le désirer), et il a fallu, pour les rencontrer (même s'il ne les rencontre jamais), que le désir l'y prépare et la parole l'y dispose, par l'espace que l'un et l'autre détient et sans le vide duquel la rencontre se remplirait, s'accomplirait, à la manière d'un événement historique.

(“Le pas au-delà”, pp.19–20)

1.『期待 忘却』は或る出会いについての物語である。出会いとは或る他者的なものとの出会いである。出会いへの欲望とは、したがって、この或る他者的なものへの欲望である。『期待, 忘却』ではこの出会いは二人の男女の出会いという形をとる。すなわち、或る他者的なものとは、この物語では人間——他者であるが、この出会いの観念はブランショの思想の中心に位置するものであり、〈言語〉論、〈作品〉論、〈思考〉論、などの理論的思索においても同様に、『期待 忘却』の二人の男女の出会いに対応する出会いがある。例えば、次の文章は表現の極限における思考について語ったものだが、やはり出会いはそこにもある。

“Il se peut... que la pensée, plus elle va loin dans l'expression d'elle-même, plus elle doit maintenir quelque part en elle une réserve et comme un lieu qui serait une sorte de non-pensée, inhabitée, inhabitable, quelque

chose comme *une pensée qui ne se laisserait pas penser*. Présence-absence dont la pensée se tourmente, sur laquelle elle veille douloureusement, avec négligence, ne pouvant que s'en détourner, si tout ce qui l'en approche l'en écarte. L'oublier serait le plus juste, car l'oubli a peut-être son origine dans cette lacune initiale et nous en fait seul pressentir la réalité "immédiate". Oublions-la donc, pour nous en souvenir seulement par l'oubli. (EI, p.173)

思考はその表現の極限において思考することのものはやできない何ものかに出会う。思考を拒絶するこの空虚な何ものか、非思考と言うべき空虚は思考にとって〈他者〉としてある。〈他者〉とは〈私〉の存在の不可能性を秘めたものである。ここで記憶にとどめるべきことはまず、 "... tout ce qui l'en approche l'en écarte." というまた、 "L'oublier serait le plus juste" という思考が非思考に対するそのしかたである。第一の言われかた「近づけるものは引き離す」は、 "... qui désire entre dans l'espace où le lointain est l'essence de la proximité (EI, p.281)." という欲望のありかたを思い出させる。思考は非思考を欲望しているのである。あるいはこう言ってもよいだろう、非思考に対峙する思考は欲望となると。思考できない非思考を思考しようとするのだから、思考は自らの思考できる以上に思考することになる。このような思考をブランショは欲望とよんでいる。 "la pensée qui pense plus qu'elle ne pense est Désir. (EI, p.176). そして、〈遠ざかり〉が〈近づき〉なのは欲望の本質なのである。欲望には距離が必要である。第二の「非思考を忘却する」との言われ方と今の欲望するとの言われようは、どういうふうに関わりあうのか？ これは忘却することはまた欲望することだと言っているのではないか？

"... l'oubli est l'espace muet, fermé, où erre sans fin le désir; là où quelqu'un est oublié, là il est désiré. (EI, p.288)". (『期待 忘却』78頁にもこの前半と同文がある)

思考の表現の極限に現れる非思考を忘れるとは名づけることである。名辞とは対象の忘却なのだ。そして、名辞のうちの忘却に或る他者的なものを封じこめるとき、この忘却された〈他者〉への欲望が名辞のうちに目覚めるのだ。名辞とは対象の忘却であり、そして対象への欲望なのである。名辞の二つの面、忘却と欲望。思考（あるいは作品）を押しすすめてゆく作業は、必然的に思考（あるいは作品）を打ち砕く思考（あるいは作品）の不可能性と出会い、思考は思考の不可能性を忘却—欲望する他ない。この出会いは思考（あるいは作品）への〈don〉であり、これな

くしては思考は思考でなく、作品は作品でないのだ。アントナン・アルトーが“l'érosion de pensée”とよんだものは恐らくこの種の出会いであり、

“Il y a donc un quelque chose qui détruit ma pensée... Un quelque chose de furtif qui m'enlève les mots *que j'ai trouvés*, qui diminue ma tension mentale, qui détruit au fur à mesure dans sa substance la masse de ma pensée.

(“Œuvres complètes, T. I, p.36)

「思考を破壊する何ものか」とは、この種の非思考のことである。また、ブランショの指摘しているように、シモーヌ・ヴェイユが〈不幸〉と名づけたものもまさしく思考することの不可能性をさしている。このとき、思考されるべきものは、この思考の不可能性を措いてはしない。“...ce qui est à penser est dans la pensée ce qui se détourne d'elle et s'épuise inexhaustiblement en elle (“Le livre à venir”, p.52)”. すなわち、思考とは、考えることの不可能性そのものである。“... cette *impossibilité* de penser qu'est ... la pensée pour elle-même ... (EI, p.173)”

2. 出会いへの欲望とは、他者を他者以外の何ものでもないものとして望むことである。つまり他者を〈私〉にとって異他的(étranger)なものとして欲望することである。

“... il désire cela dont celui qui désire n'a nullement besoin, qui ne lui fait pas défaut et qu'il ne désire pas atteindre, étant le désir même de ce qui doit lui rester inaccessible et étranger — *désir de l'autre en tant qu'autre*, désir austère, désintéressé, sans satisfaction, sans nostalgie, sans retour. (EI, p.76)”

しかし、他者を他者として欲望することは、欲望本来の性質と矛盾する。この欲望は不可能である。この点に関して、シモーヌ・ヴェイユはブランショに非常に近い考えを記している、「欲望は不可能である。それは、その対象をこわしてしまう……何ものかを望むということは不可能なのだから、無を望まなければならない。(『重力と恩寵』田辺保訳157頁)」最高度に基本的そして原始的な欲望である食欲を例にとってみれば、この場合、欲望とは対象を自分に同化することを望むことである。ここに食物がある、〈私〉はそれを食べる、それは消えると同時に〈私〉の欲望も消失する。この反対に対象に同化することを求める欲望も同じく対象を変質させてしまう。他者を他者として望む欲望とは、したがって、永遠に欲望であり

つづける欲望であって、満されることを望まないで、消失することがない。形而上学的欲望とよばれているのが、この欲望である。 “Le désir métaphysique est désir de ce avec quoi l'on n'a jamais uni, désir du moi, non seulement séparé, mais heureux de sa séparation qui le fait moi, et pourtant ayant rapport avec ce dont il reste séparé, dont il n'a aucune besoin et qui est l'inconnu, l'étranger: autrui. (EI, p.76)”

二人の人間が相互に他者としての相手を欲望するとき、彼らを相手に対して他者として成立させているのは、彼らの間の距離であり、異他性 (étrangeté) である。 “Maintenant, ce qui ‘fonde’ le rapport, le laissant non fondé..., c’est l’étrangeté entre nous: étrangeté qu’il ne suffit pas de caractériser comme une séparation, ni même une distance. /-Plutôt comme une interruption (EI, p.97).” 他者を他者としてのかぎりにおいて欲望することは、〈私〉と〈他者〉とを距てる断絶を保存したままに他者を欲望することにひとしい。『期待 忘却』の二人の主人公を支配しているのは、このような欲望であって、この欲望は欲望の不可能性と出会うような欲望である。他者を他者として望むとき、〈私〉と〈他者〉の間の距離は無限であり、その関係は最大に異他的である。ブランショが断絶 (interruption) と言うとき、この〈私〉から〈他者〉を距てる無限性と異他性のふたつの意味を同時に含んでいる。期待、そして忘却とはこの断絶のふた通りのあらわれなのである。或る意味では、期待、忘却は断絶自体である。また、或る意味では、断絶を維持しようとする努力である。したがって、或る意味では、同時に対象であって志向である。私見では、ブランショの期待と忘却の意味するものは、シモーヌ・ヴェイユの〈注意〉 (attention) と重ね合わせることができる。さきほどの「…無を望まなければならない」という欲望が〈注意〉である。シモーヌ・ヴェイユの考えるところでは、不幸とは不幸でない人々にとっては無にひとしい。つまり存在しない。われわれの眼は他人の不幸を見ることができず、思考は、シモーヌ・ヴェイユの言によれば、“La pensée fuit le malheur aussi promptement, aussi irrésistiblement qu’un animal fuit la mort. (“Attente de Dieu”, p.99)” 〈注意〉とは思考することが極度に困難な不幸を思考しようとするものである。無を望む欲望とは、言いかえれば、不幸への〈注意〉である。ブランショが期待 (attente) とよぶものはシモーヌ・ヴェイユの〈注意〉 (attention) に非常に類似したところがある。シモーヌ・ヴェイユの〈不幸〉にあたるものは、ブランショにおいては〈外〉であろう。ただ、前者においては、〈不幸〉は〈注意〉という志向の対象であって、この

関係が逆転することはないが、後者の期待そして忘却は〈外〉への志向であり、また或る程度〈外〉そのものである。

したがって、期待と忘却とは、無を望む欲望につけられたブランショ的な名である。待つそして忘れるとは望むことである。

“L’attente commence quand il n’y a plus rien à attendre, ni même la fin de l’attente. L’attente ignore et détruit ce qu’elle attend. L’attente n’attend rien. (AO, p.51)”

欲望が対象をこわすように、期待も対象を破壊する。欲望が不可能であるように、期待も不可能なのだが、この不可能性が、欲望にとってと同じく、期待にとって本質的なのだ。“L’impossibilité d’attendre appartient essentiellement à l’attente. (AO, p.50)” 期待についても、「何ものかを望むということは不可能なのだから、無を望まねばならない」と同様のことが言われねばならない。“Attendre, que fallait-il attendre? Elle se montrait surprise, s’il le lui demandait, car pour elle c’était un mot suffisant. Dès qu’on attendait quelque chose, on attendait un peu moins. (AO, p.21)”

すなわち、何ものかを持つとは待つことではないのであって、期待とは空虚に向うときだけ、期待なのである。“Quand il y a attente, il n’y a attente de rien. (AO, p.56) 欲望が欲望の不可能性への関係であるように “... le désir est précisément ce rapport à l’impossibilité, qu’il est l’impossibilité qui se fait rapport. (EI, p.67)”, 期待もまた不可能なものへの関係なのである。

『期待 忘却』は出会いのさ中における出会いの不可能性についての物語なのである。ここで、二人の主人公が直面するのは二人のもうすでに可能性では計りきれず、不可能性へと移行した関係である。『期待 忘却』は或る不可能なものについての物語である。“Fais en sorte que je puisse te parler.”—“Oui, maintenant parle-moi.”—“Je ne le puis pas.”—“*Parle sans pouvoir.*”—“Tu demandes si tranquillement l’impossible.” (AO, p.86, 強調引用者)

『期待 忘却』の二人の男女は出会うことの不可能性に会う。ブルトンの『ナジャ』を評した文で、出会いの起りかたについて述べられているが、これはブランショ自身の物語における出会いにも同様に言える。“La rencontre: ce qui vient sans venue. (AO, p.608)” “Comme si la rencontre... ouvrait dans le monde de l’avènement une distance sans terme où ce qui arrive... est l’inarrivée même. (EI, p.607)” “ce qui arrive” が “l’inarrivée” であるような場、『期

待 忘却』の二人の間の空間もまたこのような場ではないだろうか？ 次の二人の会話はこの出会いの起りかたについて言っているのではないだろうか？ “Est-ce que cela arrive?” — “Non, cela n’arrive pas.” — “Quelque chose vient cependant.” (AO, p.153)”

3. 彼女の出会いへの欲望は、彼女がくりかえし言う “Fais en sorte que je puisse te parler. (AO, pp.14, 24, 25, 26, 110)”,あるいは, “Je voudrais vous parler. (p.155)”という望みで表される。他者としての他者との出会いへの欲望は同時に, 「あなたに話す」つまり言葉への欲望なのである。だがこれはどのような言葉なのか？一読してわかるように, 彼らはひっきりなしに話しており, “... elle lui a parlé une grande partie de la nuit. (AO, p.154 c.f. pp.49–50)”, しかしこのような会話は, 彼女が確認しているごとく, “J’ai donc parlé, et parlé en vain. C’est le pire. (AO, p.155)”, 望まれた言葉からはほど遠い。彼女の望む言葉は他者としての他者を欲望する言葉なのであって, この言葉は〈私〉と〈他者〉との断絶を解消するのではなく, 断言するような言葉なのだ。ところで, 言語とはこの種の断絶を消すように働く。それは様々の物に同一の名を与え, 普遍化し平均化し, 未知のものを既知の名でよび, 既成の知識体系の中に暴力的に同一化する。このような言語は力としての言語 (le langage comme pouvoir) であって, 他者の異他性を除去し, 他者をもうひとりの〈私〉に変えてしまう。言語とは暴力なのである。“Lorsque je parle, toujours j’exerce un rapport de puissance... Toute parole est violence. (EI, p.60)”このような言語を超えた言葉を彼女は望んでいる。“...une parole qui parlerait sans égaliser, sans identifier, c’est-à-dire sans tendre à l’identité du contentement et de l’entente accomplie./ C’est-à-dire une parole qui maintiendrait dans son irréductible différence la vérité étrangère, celle de l’Etranger qui, dans sa parole même, est présence de l’étrangeté. (EI, p.90)” 彼女が望んでいる他者を他者として欲望する言葉は, 〈私〉と〈他者〉の可能な関係としての言葉ではなく, 関係の不可能性としての言語, 力なき (sans pouvoir) 言語なのだ。彼女の望みに対する彼の返答 “Parle sans pouvoir.” のように話す言葉をこそ彼女は望んでいたのだった。しかし, 文字通りこの言葉は可能性をもっていない。

4.『期待 忘却』の二人の男女が出会うことを望んでいる他者以外の何ものでもな

いものとしての他者とは、どのようなものか？これをブランショは、エマニュエル・ルヴィナスともに、〈外〉(dehors)とよぶ(註1)。他者の〈私〉に対する存在様式は外部的であるゆえに、他者とは〈私〉にとって根源的に知られざるものである。他者の内へ入りこむためには、〈私〉は〈私〉であることをやめる他ないような存在様式を、他者はとっている。この意味で、時間的な〈外〉が〈死〉だとすれば、〈他者〉は空間的な〈外〉である。類推による理論をもう一步押し進めれば、他者とは空間的に外化した〈死〉である(註2)。他者とは眼に見えるものと化した〈死〉だというモチーフは、ブランショのいくつかの物語の中に容易に見つけることができる。『死の宣告』の死からよみがえったJ.が看護婦に向かって発する言葉は、字句通りに理解すべきである。

“Elle (J.) se tourna, ensuite, légèrement vers l’infirmière et, sur un ton tranquille : “Maintenant, lui dit-elle, voyez donc la mort”, et elle me montra du doigt. (“L’Arrêt de mort” p.48)”

同様に、『望ましい時に』のクロディアは語り手に “Je ne crois guère en vous. (“Au moment voulu”, p.118)” と言うが、もちろん語り手はこの言葉の意味がよく解らない。しかし、これは彼の問い返す “Mon existence est précaire, c’est à cela que vous pensez?” ではなく、J.の言と同じく字句通り読みとらねばならない。“Elle me fixa avec une expression douteuse, qui pouvait signifier le désir et l’embarras de répondre, peut-être la fatigue, mais aussi un doute beaucoup plus important. J’eus le clair sentiment qu’elle n’était pas disposée à s’en tenir à d’aussi faibles concessions, et pour bien le dire, ne la voyant pas satisfaite, je la crus sur le point de répéter... sa phrase, il me semblait qu’elle l’avait déjà sur les lèvres, je l’entendais dans le vide de l’air. Mon anxiété à ce moment fut si vive que, pour empêcher cela qui n’eût été supportable ni pour elle ni pour personne, presque au hasard,... je murmurai: “Vous voulez dire...” Elle fit oui de la tête. “Mais cela se peut-il ? Vous me touchez, vous me parlez cependant.” Elle se redressa avec une extraordinaire violence. “Je parle! dit-elle sur le ton de l’ironie la plus grave. Je parle!” Elle jeta ce mot avec une si incroyable dureté qu’il déchira le chuchotement et devient un mot humain ordinaire, je veux dire, prononcé avec sa belle voix intacte. C’était privé de sens à un tel point que je frémis, et elle-même fut traversée d’un frisson. Tous deux, il me semble, nous fûmes

compris dans la même peur. (Ibid. p.121)”

“un doute beaucoup plus important” とは語り手の存在自体への疑いであって、『期待 忘却』の “Doutez-vous de moi?” Elle voulait dire de sa véracité, de ses paroles, de sa conduite. Mais j’entendais un doute plus grand. (AO, p.37)” にくりかえされている疑いと同様の意味をもつ。つまり、語り手がつぶやく「あなたは私が……と言いたいのですか？」のとぎれた部分は、“Vous voulez dire que *je suis mort*?” と補われるべきなのである。死という空虚に触れることはできないとの前提が語り手の「しかし、あなたは私に触れているじゃないか、私に話しているじゃないか」にはある。しかし、クロードディアのアイロニカルな返答「私が話しているですって！私が話しているですって！」が示すように彼らの会話は、クロードディアからみれば、「話す」とは言えぬものだ。そして、語り手の前提に反して、死に触れること、死を見ること、死に話すことは、ブランショの根本的な主題であり、これが出会いの意味なのであって、すなわち、このとき、出会いは、“... Il l’a vue invisible, il l’a touchée intacte. (“L’Espace littéraire”, p.180)” ように、見えぬものを見、触れえぬものに触れることにひとしい。

〈他者〉とは〈死〉なのだからこそ、〈私〉の〈他者〉への関係は可能性より逸脱してゆく。あらゆる人間的な関係は〈他者〉より〈私〉を距てる断絶においては、シモーヌ・ヴェイユの不幸な人間と社会との間には一切のコミュニケーションが極度に困難であるのと同じように、不可能である。『期待 忘却』の彼が要求する “Parle sans pouvoir.” に答える言葉だけが他者を他者として〈私〉にもたらず。“Mon rapport à lui est un rapport d’impossibilité, échappant au pouvoir, Et la parole est cette relation où celui que je ne puis atteindre vient en présence dans sa vérité inaccessible et étrangère. (EI, p.90)” “...cette distance (entre l’homme et l’homme) représente ce qui, de l’homme à l’homme, échappe au pouvoir humain — qui peut tout. Là cesse mon pouvoir, là tombe la possibilité, se désigne ce rapport que fonde le pur manque dans la parole. (EI, p.97)”

他者に接触することは、〈死〉に触れ〈私〉もまた〈死〉ぬことを意味するが、このとき〈私〉にもたらされる〈死〉とは、“non pas mort de cette tranquille mort du monde qui est repos, silence et fin, mais de cette autre mort qui est mort sans fin, épreuve de l’absence de fin. (“L’Espace littéraire”, p.181)”

と説かれる〈死〉である。ここで言う〈死〉とは内的な自我を失った人間、自らが自己にとって外部存在としてある〈私〉でなくなった〈私〉の謂である。“Avec quelle mélancolie, mais quelle calme certitude, il sentait qu’il ne pourrait plus jamais dire : “Je”. (AO, p.34)”

このような〈他者〉—〈死〉との出会いを通常の意味で経験とよぶことはできない。経験の主体であるべき〈私〉がここでは消えてしまっているからである。主体の消失という点で、〈外〉の経験と経験主体の相互関係は、或る一定以上の苦痛を経験する場合の苦痛と肉体の関係に似ている。或る程度以上の苦痛は人間には経験不可能である。〈私〉の主体が消失するような苦痛を〈私〉は経験することができないのと同様に、〈外〉と関係をもつことは〈私〉にはできない。〈外〉を経験することは、〈私〉が〈私〉を失うことにひとしい。

したがって、この出会いを経験とよぶなら、“l’expérience de la non-expérience”となり、この非経験の経験の主体については、“Jamais le moi n’a été le sujet de l’expérience. (EI, p.311)”と言わねばならぬ。ブランショが言う経験を以上のように理解したとき、経験とは、“... il n’y a expérience au sens strict que là où quelque chose de radicalement autre est en jeu. (EI, p.66)”と論じられるように、根源的に他者的な何ものかが賭けられる場である。思考が経験になりうるのは、ただこの根源的に他者的な何ものか、〈外〉を思考するときだけである。そして、ブランショの経験が「非経験の経験」であるように、〈外〉を思考する思考は思考できぬものへ向けられた思考である。このとき、“chaque pensée est une allusion à l’impossibilité de penser (AO, p.101)”となるだろう。この意味で、〈外〉を思考する思考はシモース・ヴェィユが〈注意〉とよぶ非在への眼ざしに似たものである。つまり、期待となるだろう。“La pensée de l’attente : la pensée qui est l’attente de ce qui ne se laisse pas penser, pensée que porte l’attente et ajournée en cette attente. (AO, p.101)”

5.『期待 忘却』の彼女の出会いへの欲望が或る言葉への欲望である事実は、『期待 忘却』を〈言語〉論として、つまりひとつの言葉が生まれでてくる過程として—永遠に過程のままで終わる過程だが—読むことができることを示している。二人の男女は、来たるべき言葉を形成している潜在的な(latent)ふたつの要素である。この二人が相互に異他的な他者として出会うとき、或る望まれていた言葉が誕生するのだ。だが、出会いは出会いの不可能性との出会いであり、彼女が望む力と

しての言葉を超える言葉は不可能である。この不可能という点で、この言葉は「文学と死ぬ権利」（『火の部分』所収）で集中的に論じられた文学の言語にひとしい。文学の言語とは、言語が不在と化し存在を失わせた物の物自体を、言語によって探求する試みだと規定できるとすれば、これは不可能そのものである試みである。語が語であるためには物の不在化が必要であって、物の現存を語によって求めようとすれば、語は語であることをやめねばならない。つまり、語であるかぎりの語と物自体との出会いはありえない。“Et, ici, nous évoquons l'éternel tourmant de notre langage, quand sa nostalgie se retourne vers ce qu'il manque toujours, par la nécessité où il est d'en être le manque pour le dire. (EI, p.50)”

この語と物自体の不可能な出会いが、『期待 忘却』にみられる二人の出会いに、〈言語〉論の次元での対応する原型的イメージである。彼ら二人の間の断絶は、語と消失した物自体とを距てる超られない距離にひとしい。

“Nous ne sommes pas rencontrés.” — “Mettons que nous nous soyons croisés : c'est mieux encore.” — “Comme c'est douloureux, cette rencontre du croisement.” (AO, p.84)”

しかし言語が、“Le langage ne commence qu'avec le vide. (“La part du feu”, p.327)” であるように、〈私〉から他者を無限に距てている除去できない断絶なくしては、他者は他者ではない。したがって、物自体を求める文学の言語の「永遠の苦悩」は、「このすれちがいによる出会いはなんと苦しいものか」という叫びとともに不可避である。

“Donne-moi cela.” — “Je ne puis vous donner ce que je n'ai pas en mon pouvoir. A la rigueur, ma vie, mais cette chose...” — “Donne-moi cela.” (原文改行) “Il n'est pas d'autre don.” — “Comment y parviendrais-je?” — “Je ne le sais pas. Je sais seulement que je vous le demande, que je vous le demanderai jusqu'à la fin.” (AO, p.112)”

これが彼女の出会いへの欲望を表わすもうひとつの形である。“cela”を“cette chose”だとして理解すると、「私の命はあげられるが、あなたの欲しいそれは無理だ」となる。これを「文学と死ぬ権利」の〈言語〉論に対応させて考えると、「命」とは力としての言語の要求するものであって、“cela”とは不可能な言葉（つまり文学の言語であるが）が望む物自体であると推論できる。言語は物の命＝現存を奪い語とするゆえに、力としての言語なのだ。が、文学の言語は消え去った物自体を望む。“Qui voit Dieu meurt. Dans la parole meurt ce qui donne vie à la parole;

la parole est la vie de cette mort, elle est “la vie qui porte la mort et se maintient en elle.” (註3) Admirable puissance. Mais quelque chose était là, qui n’y est plus. Quelque chose a disparu. Comment le retrouver, comment me retourner vers ce qui est avant, si tout mon pouvoir consiste à en faire après? Le langage de la littérature est la recherche de ce moment qui la précède. (“La part du feu”, p.329)”

彼女の“cela”への要求に彼が答えられないのは、彼の“Parle sans pouvoir.”に彼女が答えることのできないのと同様である。この二人の望みは同一のあるいはさまざまな形でくりかえされている。したがって、次の会話はどちらが彼でどちらが彼女の言であるか決定できないのであって、またどちらでも同じ意味になるだろう。

“Chaque fois que tu refuses, tu refuses l’inévitable.” — “L’impossible.”
— “Tu rends l’impossible inévitable.” (AO, p.83)”

不可能であって、不可避なもの、それが出会いである。『期待 忘却』はこの不可能なものが不可避になってゆく過程である。

6. “L’oubli, le don latent.

Accueillir l’oubli comme l’accord avec ce qui se cache, le don latent...

Dans l’oubli, il y a ce qui se détourne et il y a ce détour qui vient de l’oubli, qui est l’oubli.” (AO, pp.87-88)”

“Il était étrange que l’oubli pût s’en remettre ainsi à la parole et la parole accueillir l’oubli, comme s’il y avait un rapport entre le détour de la parole et le détour de l’oubli.

Ecrivant dans le sens de l’oubli.

Que l’oubli parle par avance en chaque parole qui parle, ne signifie pas seulement que chaque mot est voué à être oublié, mais que l’oubli trouve son repos dans la parole et maintient celle-ci en accord avec ce qui se cache.

L’oubli, dans le repos que lui accorde toute vraie parole, la laisse parler jusque dans l’oubli.

Que l’oubli repose en toute parole. (AO, pp.88-89)”

彼女の言う“Il n’y a pas d’autre don.”の“don”は忘却を、或る意味では、さしているのではないか。ここで説かれているように、忘却と言葉の生成は密接に結ばれており、“le don latent”のlatentが或る程度 l’attente であることは言わない

までも、出会いへの欲望が或る言葉への欲望だとすると、これはまた忘却への欲望ではないのか。“Elle désirait extraordinairement l’oubli... (p.64)” “C’est de vous que je veux être oubliée, de vous seul.” (p.65)”

語が物を不在化することにおいて物自体からの逸脱 (détour) であるように、忘却も忘れられる対象よりの逸脱である。“De là qu’une parole, même disant la chose oubliée, ne manque pas à l’oubli. (EI, p.289)” 忘れられた対象を名ざしている語でさえ、この点で、忘却とかわるところがない。一言で言えば、語とは物の忘却の外化したものであって、われわれは物を忘れるからこそ、話すことができる。さらに、物の忘却である語そのものも、忘却にさらされつつ話されるとき、最も本質的に話す。恐らく、『期待 忘却』の断片的な二人の男女の対話は、このような場で話されているのである。

“Lorsque nous apercevons que nous parlons parce que nous pouvons oublier, nous apercevons que ce pouvoir-oublier n’appartient pas seulement à la possibilité. D’un côté, oublier est un pouvoir : nous pouvons oublier, grâce à quoi nous pouvons vivre, agir, travailler et nous souvenir — être présent : parler ainsi utilement. D’un autre côté, l’oubli échappe. Cela ne signifie pas seulement qu’une possibilité, par l’oubli, nous est ôtée, et une certaine manière irrévélée, mais que *la possibilité qu’est l’oubli est glissement hors de la possibilité*. En même temps que nous nous servons de l’oubli comme d’un pouvoir, le pouvoir d’oublier nous remet à l’oubli sans pouvoir, au mouvement de ce qui derobe et se derobe, le détour même. (EI, p.290)” (強調引用者)

力としての言語を超えた彼女の望む不可能の言葉が、言葉であってすでに不可能性への移行であるように、忘却は力としての忘却のままですでに pouvoir-possibilité から脱け落ちてゆく性質にある。力なき忘却によって (l’oubli sans pouvoir) によって、〈私〉から〈他者〉への距離は純粹に保たれたまま、忘れられた対象に結びつく。“... en vous oubliant, j’en suis venu à un pouvoir de vous oublier qui me dépasse de beaucoup et qui me lie, bien au delà de moi, à ce que j’oublie... (AO, p.148)”

彼の“Parle sans pouvoir.”に答えられるのは、“l’oubli sans pouvoir”によって対象を忘却しているような言葉であるにちがいない。このとき、話すとは、“... parler, c’est puiser au fond de la parole qui est l’inépuisable. (AO, p.141;”

EI, p.40)”

7. “Dans l’oubli, qu’est-ce qui nous séparera?” – “Qui, qu’est-ce qui pourrait bien nous séparer?” – “Rien, sauf l’oubli qui nous réunira. (AO, p.84)”
(了)

註1. “L’être est extériorité.” (Emmanuel Levinas, “Totalité et infini”, Martinus Nijhoff, p.266)”

註2. ブランショの〈外〉とシモーヌ・ヴェイユの〈不幸〉とが、さまざまな点で親近性を合わせもっているとするれば、ブランショの他者とはシモーヌ・ヴェイユの言う不幸な人間に非常に類似した概念だとしても、意外なわけではないだろう。“Le pas au-delà” (1973) にブランショは不幸についていくつかの断片を収録しているが、いずれも、シモーヌ・ヴェイユの不幸論とみまごうばかりである。c.f. 同書 173–174 頁。

註3. ヘーゲル『精神現象学』序論の一節であるが、イポリットの仏訳とはやや異っている。斜字部がブランショの引用している部分に相当する。“Ce n’est pas la vie qui recule d’horreur devant la mort et se préserve pure de la destruction, mais *la vie qui supporte la mort et se maintient en elle* qui est la vie de l’esprit. (“Préface de la Phénoménologie de l’esprit, traduction, introduction, notes par Jean Hyppolite”, p.79)”

(AO – “L’Attente l’oubli”, EI – “L’Entretient infini”)